

放逐された転生貴族は、  
自由のやらせて  
もらいます  
5

Nagao Takao

[著] 長尾隆生 [ill.] ヨギ

### エニシュ

辺境砦でトーアと  
共に育った青年。  
火と雷系統の  
攻撃魔法が得意。

### ファウラ

自身の姿を消す  
力を持つ  
魔族の少女。  
実は魔王の片割れ。

### トーア

日本で暮らしていた記憶を  
持つ転生者。実家の貴族家を  
放逐されたものの、  
辺境の砦で鍛え上げた力で  
冒険者になる。

### グラッサ

ニツカの親友で、彼女を  
冒険者に誘った少女。  
とても珍しい  
デュプリケート  
複製魔法を使える。

### リファ

トーアの昔馴染みで  
エニシュの妹。  
スカーレットバスターと  
いう大剣を操る。

### セレーネ

創世の女神セレーネ  
として崇められている。  
現在は永い眠りに  
ついている。

### チェキ

ドワーフと  
エルフの間に生まれた  
亡国の王女。  
アプレイザル  
鑑定の使い手。

### ニツカ

リザレクション  
再生魔法という  
珍しい魔法の使い手。  
トーアと行動を共に  
することに。

## 登場人物紹介

## ◆序章◆

俺、山崎翔垂やまざき しょうとはある日、プレアソール王国という国の貴族家の次男、トーア・カシートとして、異世界に転生した。

貴族の子息ならば悠々ゆうゆう自適じてきな生活が送れると思ったのだが――落ちこぼれだった俺は八歳にして、隣接する魔の森から絶えず魔物が押し寄せる危険な辺境とちでの砦とりでに、修業の名目で送られることになる。猛者もさたちに鍛えられながら、死に物狂いで何とか生き残った俺だったが、父の死をきっかけに、当主を継いだ兄、グラーズから、勘当かんとを言い渡されてしまう。

貴族の身分を捨て冒険者になった俺は、同じく冒険者になったばかりのニツカとグラッサという少女たちと知り合い、トラブルに巻き込まれつつも行動を共にするようになった。

兄と和解したり、ドワーフの国や魔族の国、エルフの国に行ったりと、旅を続けた俺たちは、ついに俺が育った辺境砦ウオイラスに戻ってくる。

そこで七人の師匠たちと再会した俺は、ここが思い描いていたような異世界ではなく、地球から遠く離れた、テラフォーミングされた惑星であることを知る。

さらに、師匠たちは驚きの情報を俺にもたらす。

この星に降り立った宇宙船の唯一の生き残り上條月こそが、この世界の神話で語られる『女神セレーネ』であること。彼女がA Iの協力でクローンとして蘇らせた仲間たちが『十神』と呼ばれる存在であること。彼らが何度もクローンを作り記憶を移し替えてきた、ある意味末裔のような存在が師匠たちであること。

そして俺自身は、女神の友人である山崎翔垂の転生体やクローン——ではなく、彼と同じ遺伝子情報を持つよう、彼の古い遺髪に残された情報をもとに、長い時間をかけた計画によって生まれた存在であることがわかった。

女神セレーネは現在、神話にあるように長い眠り——コールドスリープについている。

一度目の目覚めの際、この惑星に元々存在した『魔素』のせいで、魔物や魔法が存在する星になつてしまったことに絶望したのだ。

そんな彼女を目覚めさせ、魔の森の最奥部にある宇宙船、『女神の揺り籠』と呼ばれるソレから連れ出す計画を、師匠から持ちかけられた。

計画の実行は三ヶ月後。それまでに仲間を集める必要がある。

そんな折、王都にいる兄から、国王の病状悪化に伴う継承者争いの悪化の報せを受けた俺は、王国の情勢安定のため、王都に向かうことにしたのだった——

「——つたく、無駄にデカイ壁だよな。ここを越えるのも久しぶりだ」

眼前に聳え立つプレアソール王国の王都を囲む外壁。

その威容を見上げながら、俺は隣に立つ仲間——リファの背中を軽く叩いた。

最後にこの壁を見たのは、ニッカたちと旅に出るときだったか。

「トリア、感傷に浸っている暇はないぞ。早く中に入ろう」

低く、しかし鋭い声で俺を窘めたのはリファだ。

彼女の背負う大剣スカーレットバスターが、夕暮れ前の陽光を反射して鈍い光を放っている。

彼女は今回の旅に際して師匠たちが護衛として付けてくれた、俺のかつての戦友であり、剣の師匠の一人でもある。

「わかっているよ。それにしても、この時間でも門は混んでるな」

俺たちが到着したのは、王都の南門。辺境砦から王都へやってくる際に最も近い門であり、人や馬車の往来が激しい。

門を通過しようとする人々が長い列を作り、衛兵たちが一人ひとり身分を確認しているのが遠目にも見える。

「表から堂々と入るのか？ 勘当されたお前がカシート家の紋章を見せても、逆に怪しまれるだけ

だと思っけど」

リファが訝しげに俺を見る。

彼女の言う通り、下手に騒ぎを起せば、兄が所属するマグダフ派の政敵——バフェル公爵の息がかかった者に俺たちの動きが察知される危険性もある。

「まさか。裏口から失礼させてもらうさ」

俺はニヤリと笑みを浮かべると、人混みから少し離れた壁際へと移動する。リファも心得たように、周囲を警戒しながら俺に続く。

「昔取った杵柄<sup>きねづか</sup>ってやつを見せてやるよ。いいか、俺の動きに合わせる」

「ふん、お前に合わせるまでもない」

軽口を叩き合いながらも、俺たちは衛兵の巡回の僅かな隙を突く。

俺は壁に手を触れると、土魔法でほんの一瞬だけ、足をかけるための小さな突起を作り出す。

それと同時にリファが、まるで猫のような身軽さで壁を駆け上り、俺が突起を消すよりも速く、壁の上に到達していた。

「相変わらず無茶苦茶な身体能力だな……」

「お前も早くしろ。見つかるぞ」

壁の上から手招きするリファに、俺も負けじと身体強化魔法を重ねかけし、一気に壁を飛び越

える。

音もなく壁の内側に着地した俺たちは、すぐに物陰に身を隠し、周囲の気配を探る。

平民街だ。

最後に見たときと変わらない喧騒<sup>けんそう</sup>と活気がそこにはあった。

だが、耳を澄ませば、活気の中に以前はなかった種類のざわめきが交じっていることに気付く。

「さて、ここから貴族街まではどう行く？ また壁越えか？」

「いや、さすがに貴族街の壁は警備が段違いだ。こっそり門を抜ける」

俺たちは人目を避けながら、裏路地を選んで貴族街へと続く内側の門を目指す。

道中、すれ違う人々のひそひそ話や、酒場の開いた窓から漏れ聞こえる会話に意識を向ける。

『またマグダフ派の奴が捕まったらしいぜ』

『第二王子に取り入ってから、バフェル公爵の好き放題だな』

『どこからあんな金が出てくるんだか……不正の噂も絶えねえってのに』

そんな生々しい噂が、俺の耳にも届いた。

「思ったより状況は悪そうだ」

「だから私たちが呼ばれたんだろう。さっさと終わらせて砦に戻るぞ。ニツカたちが心配だ」

リファの口から、砦に残してきた仲間たちの名前が出たことに少し驚く。

普段は他人にあまり興味を示さない彼女だが、以前の戦いで多少なりとも情が移ったのかもしれない。

壁にはバフェル公爵を称賛するようなポスターがあったと思えば、その隣には悪口が書かれており、それを慌てて消そうとする衛兵の姿もあった。

街の空気は明らかに不安定だ。

そうして辿り着いた貴族街の門は、平民街とのそれとは比べ物にならないほど警備が厳重だった。しかし、俺たちは事前にグレースから受け取っていた特別な通行証と、リファが辺境砦から持ち出した認識障害の魔道具を使い、怪しまれることなく門を通過することに成功した。

門をくぐると、空気だけでなく、貴族街の様子も以前とは変わっていた。

以前よりも巡回する衛兵の数が増え、見慣れぬ鷲の紋章——バフェル公爵家のものだろう——をつけた、より物々しい装備の兵士たちの姿も目についた。

貴族たちの表情もどこか硬く、道行く馬車の速度すら、以前より速まっているように感じられる。街全体が、見えない何かに急かされているような、妙な緊張感に包まれていた。

整然としていて、そしてどこか冷たい。

そんな貴族街の空気であることは変わらないが。

磨き上げられた石畳、手入れの行き届いた庭園、壮麗な屋敷。俺にとっては息苦しいだけの場所

だった。

「空気がまずいな」

リファが顔をしかめて呟く。

彼女もこの貴族特有の空気が苦手なのだろう。

「全くだ。さつさと用事を済ませるとしよう」

俺たちは足早にカシート家の屋敷へと向かう。

夕暮れが迫り、屋敷の窓からは温かい光が漏れ始めている。だが、その光景に俺の心が和むことはない。

むしろ、これから待ち受けている兄との対峙に、僅かな緊張があった。

やがて、見慣れた紋章が刻まれた門が見えてきた。

門番は俺たちの姿を認めると、嫌な表情を浮かべたが、リファが辺境砦の紋章が描かれた書状を見せると慌てて敬礼し、屋敷の中へと駆け込んでいった。

恐らく、俺たちの現在の立ち位置を示すようなものなのだろう。

「さて、始めようか。リファ」

「ああ。トリアの見せ場、作ってやらないとね」

不敵な笑みを浮かべるリファと共に、俺は開かれた門の中へと、静かに足を踏み入れた。

老執事に導かれ、俺とリファは重厚な扉の前に立っていた。

父が、そして今は兄グラスが使っている執務室だ。

扉の向こうにいる兄の存在を感じ、俺は小さく息を吐く。

「グラス様。トーア様、並びに辺境砦よりリファ様がお見えになりました」

執事が厳かに告げる。

「入れ」

中から響いたのは、落ち着いた、しかしどこか張り詰めたような声だった。当主としての重圧か、それとも王都の不穏な空気故か。

執事が恭しく扉を開ける。俺はリファと短く頷きを交わしてから、一步、部屋へと足を踏み入れた。リファも気負うことなく後に続く。

室内は、父が使っていた頃とほとんど変わらない。壁一面の本棚、重厚な執務机、そして部屋の隅には客をもてなすためのソファセット。

ただ、机の向こうに座る兄の纏う空気が、以前とは明らかに違っていた。

「私の呼び出しに応じてくれて感謝する、トーア。それにしても辺境砦の腕利きまで連れてくるとは……たしか、リファ殿だったか。以前一度会ったことがあるな。トーア、事態の深刻さは理解し

ているようだな？」

書類から顔を上げたグラスが、静かに俺たちを見据えて言った。

猜疑心よりもむしろ、状況を共有する者への確認のような響きだ。

「グラス当主にはご無沙汰しております。トーアの護衛として同行いたしました」

リファが簡潔に、しかし力強く応じる。

こういうところは、彼女の兄貴と比べて本当にしつかりしている。

「ああ、グラス。手紙の内容は穏やかじゃなかったからな。それに、こいつがどうしても付いてくると言っている」

俺は少し肩をすくめながら、以前よりは幾分か砕けた口調でそう言った。

「そうか。まあ、お前だけでなくリファ殿も来てくれたのは心強い。座ってくれ」

グラスは僅かに眉を動かしたが、特に咎めるでもなくソファを勧めてきた。

俺とリファはソファに腰を下ろす。老執事が音もなく紅茶を準備し始めた。

以前のような針の筵のような居心地の悪さはないが、それでも完全な安らぎとは程遠い空気が漂う。

「手紙で伝えたが、ラックラの処刑は既に済んでいる」

ラックラとは、グラッサを騙し彼女を利用していた男だ。ドワーフ王国で捕らえ、この王都に

送っていたのだが、兄が上手く事を運んでくれたようだ。

グラーズは紅茶を一口含むと、カップをソーサーに戻し、切り出した。

「だが、問題の根源は消えていない」

「バフェル公爵のことだろうか？」

俺が核心に触れると、グラーズは頷いた。

「そうだ。公爵は老獺だ。ラックラの商会との後ろ暗い商売がばれたことで勢力を落としていたが、第二王子に取り入り、水面下で急速に勢力を回復させている。国王陛下の御容体も芳しくなく、跡継ぎ問題は日に日に深刻さを増している」

ここまでは、手紙で聞いた通りだな。

彼は立ち上がり、窓辺に近寄りながら続けた。

「バフェル派は、我らマグダフ派の要人を失脚させて自派の人間を要職に送り込もうと、様々な策を巡らせている。このままでは、王国は内側から崩壊しかねん」

「そして、バフェル公爵はおそらく俺のことも邪魔だと考えているはずだ」

「ああ。お前の存在と能力は、公爵にとって計算外の要素だ。特に、お前が私と再び接触したとなれば、必ず排除しようとするだろう。既に刺客が放たれている可能性も高い」

グラーズは窓の外を見つめたまま、厳しい口調で告げた。

「だから、俺を呼び出したんだろう？ バフェル公爵を完全に排除するために」

俺はソファから立ち上がり、グラーズに向き直る。

「そうだ。お前の力が必要だ。……我が家とお前の縁は切れているが、今はそんなことを言っている場合ではない。カシート家のため、いや、王国のために力を貸してほしい」

グラーズはこちらを振り返り、まっすぐに俺の目を見て言った。

その瞳には、以前にはなかった、弟に対する……いや、一人の戦力に対する期待のようなものが僅かに見えた気がした。

「わかっている。俺も奴とはケリをつけなきゃならない。それに、バフェル公爵のやり方は見過ごせない」

俺は真剣な表情でグラーズを見返す。

まずは目の前の敵、バフェル公爵に集中すべきだ。ここで魔の森や女神の話をするのはまだ早いだろう。

「それで、バフェル公爵を追い詰めるための具体的な策はあるのか？」

俺が尋ねると、グラーズは再び執務机に戻り、一枚の羊皮紙を取り出した。

「いくつか奴の不正に繋がる手がかりは掴んでいる。特に、第二王子派への資金の流れだ。だが、決定的な証拠がない」

グラーズは羊皮紙を机に広げる。そこにはいくつかの貴族の名前や商会の名前が記されていた。「バフェル公爵は、用意周到に金の流れを偽装している。通常の調査では尻尾を掴みません」

「つまり、俺たちにその尻尾を掴んでこい、と？」

「そうだ。お前たちのやり方なら、あるいは可能かもしれない」

グラーズは俺とリファを交互に見る。

潜入や隠密行動、そしていざというときの戦闘能力。貴族社会のルールに縛られない俺たちだからこそ出来ることがあると、彼は踏んだのだろう。

「わかった。利害は一致している。バフェル公爵の排除には、俺も協力しよう。ただし、事が終われば王国からの正式な支援は約束してもらおう」

俺は改めて条件を確認する。

「わかっている。カシート家、そしてマグダフ派の名において約束しよう」

グラーズは頷く。

「だが、勘違いするな、トーマ。これはあくまで王国と、お前の利害が一致した結果だ。貴族社会は甘くない。それをゆめゆめ忘れな」

釘を刺すグラーズ。

俺は「承知している」と返す。

それでも、以前のような完全な拒絶ではない。

とはいえそれは兄弟としてではなく、共闘関係としての最低限の信頼だ。

「それで、具体的にどう動く？ まず洗うべきはどこだ？」

俺とグラーズ、そしてリファの視線が、広げられた羊皮紙に向けられる。

王都の闇に潜む陰謀を打ち破るための、危険な協力が、今、静かに始まるうとしていた。

## ◆第一章◆

グラスとの協力態勢を固めた俺とリファは、早速行動に移った。

兄から提供された情報は多岐にわたったが、まずは公爵の裏の顔を暴くのに効果的と思われる『黒曜商会』の倉庫を当てることに決めた。

表向きは美術品などを扱う貿易会社だが、その実態はパフェル公爵の資金洗浄と禁制品密輸の拠点だという。

「貴族街の外れとはいえ、警備の目はある。油断は禁物だ」

「ああ。だがまさか公爵も、自分の懐にいきなり飛び込んでくる馬鹿がいるとは思っていないだろう」

夜の闇に紛れ、俺たちは貴族街の裏路地を進む。

リファの気配遮断の技術は完璧で、まるで闇そのものが移動しているようだ。

俺も魔法で気配を消し、魔力探知で周囲の警戒を怠らない。

王都の夜は静かだが、その静寂の下には様々な陰謀が蠢いている。

やがて目的の倉庫が見えてきた。人通りが途絶えた区画に、それはひっそりと佇んでいた。

石造りの頑丈そうな建物で、入口の上には『黒曜商会 第一倉庫』の看板が掲げられている。周囲に警備兵の姿はない。

「見た感じ、物理的な警備は手薄だな。問題は魔法か」

「頼んだぞ、トーア」

リファは短く言うと、音もなく近くの建物の屋根へ駆け上がり、大剣を抜いて周囲を警戒する。月明かりの下、その銀色の刃が冷たく光った。

俺は倉庫の壁に慎重に近づき、内部探知の魔法を発動させる。

警備兵が二人。奥の管理室には警報トラップ。解除は可能だが、念のため別の罠がないか確認して……大丈夫そうだな。

岩でダルウィーに魔道具の構造を叩き込まれたおかげで、トラップの種類と解除方法は大体わかる。

「まずは音を消す。沈黙魔法」

倉庫周辺に音を遮断する結界を展開。次に扉の鍵に手をかざす。

「解除魔法」

カチャリ、というごく微かな音。重厚な鉄の扉が抵抗なく開いた。

俺は音もなく中に滑り込む。

倉庫の中はひんやりとしており、様々な匂いが混じり合っていた。

高価そうな香辛料、薬品、そして間違いなく禁制品であろう甘ったるい麻薬の匂い。積み上げられた木箱には、見慣れない異国の紋章が押されているものもある。

なるほど、ここで密輸品の受け渡しや、資金洗浄も行っていたわけか。

内部探知で把握していた警備兵の位置へ、影のように進む。

通路脇の小さなテーブルで、二人の男が突っ伏して居眠りしていた。酒瓶が転がっているところを見ると、勤務中に一杯やっていたらしい。

「緊張感がないな。氷拘束魔法」

無詠唱で魔法を発動。眠りこける二人の体を、一瞬で氷像に変える。彼らが目を覚ますことは、しばらくないだろう。

俺はそのまま倉庫の最奥、管理室と思われる扉の前へ進む。

「警報トラップの魔法を解除して、と……」

魔力を慎重に流し込み、トラップを無力化する。それから解錠魔法で鍵を開け、扉を静かに開けた。

管理室の中は、倉庫とは対照的に整理整頓せいりせいとんされていた。

大きな執務机の上には、帳簿らしきものが数冊と、インク壺いんく、そしてペン。壁際には大きな鉄製の棚があり、嚴重に鍵がかかっている。ここが公爵の裏仕事の心臓部だろうか。

俺はまず、机の上の帳簿を手取る。

第二王子派への送金記録……間違いない。日付、金額、金の流れ……グラスが掴んでいた情報と一致する。

それに、このリストは……武器密輸か。反乱でも起こすつもりか？

帳簿からは、公爵の野心が生々しく伝わってきた。

これだけでも十分な証拠になる。俺は他の帳簿も素早く確認していく。

麻薬、禁制品、奴隸……いや、これは違うな。人身売買ではない……

眉をひそめる。奴隸とは違う、不気味な単語が記されていた。詳細な記述はないが、何か非人道的な研究に関わっているのかもしれない。

そして、一番下の帳簿を開いたとき、俺は息を呑んだ。

走り書きのようなメモが挟まれていたのだ。

『『女神の揺り籠』……探索部隊派遣……『古代遺物』……回収急務……魔の森……座標……』

断片的な単語。だが、俺にはその意味がよくわかった。

バフェル公爵は、やはり『女神の揺り籠』の存在を知り、その力を探っていたのだ。

おそらく、王位継承争いを有利に進めるため、あるいはさらなる野望のために。  
やはり繋がっていたか！

確証を得て、帳簿を懐に仕舞おうとした、その瞬間だった。

鋭い殺気が背後から迫る。

それは熟練した者だけが放つ、研ぎ澄まされた純粹な殺意！

「しまった！」

咄嗟に身を捻り、床を転がる。

直前まで俺がいた場所に、黒い短剣が深々と突き刺さっていた。

音もなく、まるで空間に吸い込まれるように。

「ほう、勘がいい。だが、ここで終わりだ、トーマ・カシート」

声の主は、いつの間にか管理室の入口に立っていた。

その気配の消し方、佇まい、ただならぬ熟練者のそれだ。

黒装束に仮面で顔は窺えないが、その体捌きと放つ殺気は、そこらのチンピラとは次元が違う。

プロの暗殺者——それも相当の手練れた。

手にした短剣には禍々しい紫色の光が宿っている。

辺境砦時代に体験してきた、魔の森の瘴気に似ている……？ いや、もっと凝縮された、古代の

呪物のような禍々しさだ……！

単なる毒や呪いではないぞ、これは……！

俺は咄嗟に身構えた。

「貴様、バフェル公爵の手の者か！」

「さあてな。だが、貴様の行動は全て把握していた。この管理室こそが貴様の墓場となる」

「情報が筒抜けだったか……グラスめ、詰めが甘い！」

「死人に言い訳は不要だ」

暗殺者が低い姿勢から、紫の光を放つ短剣を構え、床を蹴る。

その動きには一切の無駄がない。

狭い室内での戦闘は極めて不利だ。

「リファア！」

俺は叫び、同時に氷壁魔法で暗殺者の足元を凍らせ、動きを一瞬阻害する。

それとほぼ同時に、管理室の壁が外から轟音と共に粉碎され、リファアが大剣を構えて飛び込んできた。

「トーマ！ 油断しすぎだ！」

「悪かった！ そいつ、手強いぞ！」

リファの大剣スカートレットバスターが、暗殺者の毒短剣と激しく打ち合う。火花が散り、金属音が室内に響き渡る。

「ちいっ、手練れか！」

暗殺者はリファの実力を見て取り、一旦距離を取る。

リファの剣技は辺境砦でも屈指だ。

たとえプロの暗殺者でも、真正面から打ち合うのは分が悪い。

「だが、二人まとめて葬ってくれ！」

暗殺者が懐から複数の黒い球を取り出し、床に叩きつける。

パン！ パン！ パン！

閃光弾と、煙幕弾。

「トアア！」

「リファ、伏せろ！ 息を止めて！」

俺たちは咄嗟に床に伏せ、息を止める。

強烈な光と音、そして鼻をつく異臭が部屋を満たす。

まずい、視界が悪い上に毒煙か！

煙幕弾が、おそらく毒か麻痺効果のあるものだったのだろう。

体勢を立て直そうとした瞬間、煙幕の中から暗殺者の気配が鋭く迫る。

リファが俺を庇うように前に出る。

大剣が煙幕を切り裂き、迫る刃を弾く音が聞こえる。

「くそっ、このままじゃジリ貧だ！」

俺は魔力探知で暗殺者の位置を探りながら、反撃の機会を窺う。

敵は一人、だが動きが速い上に、油断すればこちらが毒を食らう。

リファが前衛で抑えている間に、俺が魔法で決めるしかない！

俺はあえて変則的な軌道の土魔法を発動させる。

「リファ、足元に注意しろ！」

「言われずとも！」

俺が合図を送ると、リファは大きく横に跳んで、暗殺者の攻撃を回避する。

その瞬間、俺は床から無数の土の槍を突き出させた。

「なっ！」

暗殺者は咄嗟に後方へ回避するが、体勢が崩れる。

「今だ！」

好機。

俺は立ち上がりざま、両手に炎と氷の魔法を同時に発動する。

「フレッシュアップ火球魔法！ フレッシュアップ氷槍魔法！」

二つの相反する属性の魔法が、暗殺者目掛けて同時に放たれる。

「ぐっ……！ 小賢しい！」

暗殺者は毒短剣で氷を砕き、身を捻って炎を避けるが、完全に回避することは出来ず、黒装束の一部が燃え上がる。

俺はさらに追撃の魔法を——と思った瞬間、暗殺者は再び特殊な煙幕弾を投げつけてきた。

視界が奪われるだけでなく、今度は魔力探知すら阻害する濃密な煙だった。

そして煙が晴れたときには、暗殺者の姿は完全に消えていた。

消えた!?

窓は破られているが、そこから逃げたにしては、気配が途切れるのが早すぎる。

何か特殊な隠形術おんぎょうじゆつか……!?

「逃がしたか！」

「追うぞ、トアア！」

俺たちは煙を払いながら窓へ駆け寄る。

暗殺者の姿は既に見えない。

「くそっ、逃げ足だけは速いな！」

リファが悔しげに悪態をつく。

「いや、深追いは危険だ。それより証拠を確保して撤退する。騒ぎに気付いて他の連中が集まってくるぞ」

俺は冷静に判断し、机の上の帳簿と、念のため魔法でこじ開けた鉄製の棚にあった重要そうな書類を素早く掴む。

「リファ、行くぞ！」

「了解！」

俺たちは破壊した壁から倉庫の外へ飛び出す。案の定、周囲の建物から新たな敵の気配が迫っていた。

「待ち伏せか！」

「数が多いな！ キリがないぞ！」

次々と現れる黒装束の敵。矢や魔法が降り注ぐ。

「リファ、道を切り開く！ 合わせろ！」

「心得た！」

俺はリファの背後から、広範囲の爆裂魔法ブレスティングボムと風魔法を組み合わせ、敵の包囲を強引にこじ開ける。

リファはその隙を見逃さず、大剣で薙ぎ払いながら突進する。

「邪魔だ！」

敵が次々と吹き飛ばされる中、俺たちは王都の裏路地の闇へと駆け出した。背後からは多数の追手の気配が迫っている。

「しつこいな！」

「このままじゃ、カシート家に戻る前に捕まる！」

走りながら俺は懐の証拠を確認する。これを無事にグラスに届けなければ。

「トア、あれを使え！」

リファが叫ぶ。辺境砦を出る前に師匠の一人であるダルウィーから『緊急用』だと無理やり渡された、試作品の転移の魔道具のことだ。

昔『転移魔法や魔道具はないのか』と聞いたときには『ない』と言われたものだが、いつの間にか開発してあったらしい。

「だが、あれはまだ調整が不十分で、何が起るかわからないって……！」

「やるしかないだろう！」

リファの言葉に覚悟を決め、俺は収納から手のひらサイズの、複雑な回路が刻まれた球体を取り出す。

「頼むぞ……！！ 発動！」

俺が魔力を込めると、球体は一瞬、夜空を昼に変えるほどの眩い光を放った。

俺は視界が真っ白になり、同時に体が強く引つ張られるような感覚に襲われるのだった。

光が収まり、ふらつく足で着地した場所は……古びた石造りの広間だった。

そして目の前には、驚愕と怒りに顔を歪ませた男と、彼を囲む十数人の貴族らしき姿があった。

あの男は……バフェル公爵だ！ 昔見たことがあるから間違いない。雰囲気からして、密会中だったのだろうか。

どうやら魔道具は、どういう仕組みかわからないが、俺たちをバフェル公爵の元に連れてきたようだ。

ダルウィーめ、とんでもない魔道具を寄越してくれたものだ。

敵の懐、それも密会の真っ只中に俺たちを放り込まれることになるなんてな。

「な、何奴だ！」

「どこから現れた！」

周囲の貴族たちが狼狽し、剣の柄に手をかける。

「カシートの小童！ まさかここまで直接乗り込んでくるとはな！ 愚か者め！」

パフェル公爵はすぐに状況を理解したのか、憎々しげに顔を歪め、円卓の中央に置かれた黒く輝く宝珠を掴み、高く掲げた。

「ちようど良い。この『魂喰らいの宝珠』の力を試す最初の贄がお前たちだ！」

宝珠は不気味な黒い光を放ち、禍々しい魔力が津波のように広間を満たす。

「ぐっ……！ この重圧は……！」

体が鉛のように重くなり、体内の魔力の流れが著しく阻害されるのを感じる。

リファも動きが鈍り、大剣を構えるのがやっとの状態のようだ。これはまずい。

「はーっはっは！ この宝珠の力の前には、いかなる魔法も剣技も意味をなさぬわ！ 魔力そのものを喰らい、衰弱させる！ さあ、我が力の前にひれ伏し、我が僕となるがいい！」

公爵が宝珠を俺たちに向けてると、宝珠から黒い影のような触手が無数に伸びてくる。

それに触れれば魂ごと喰われるような、本能的な恐怖が背筋を走った。

「リファ、避ける！」

俺は咄嗟にリファを突き飛ばそうとするが、体が思うように動かない。自身も迫る触手から逃れられない。

「くそっ！」

黒い触手が俺の体に絡みつこうと迫る。

避けきれない。

そう覚悟した瞬間、リファが俺の前に飛び出し、大剣スカーレットバスターを盾のように構えた。

「トアア！」

ガギンツ。ガギンツ。ガギンツ。

大剣が黒い触手を辛うじて受け止める。しかし、その衝撃は凄まじく、リファの体が大きく揺らぎ、その口から苦悶の呻きが漏れる。

大剣の表面には、見る間に細かい亀裂が蜘蛛の巣のように広がっていく。

「リファ、もういい！」

「まだだ……！ この程度で……トアアを……！」

リファは歯を食いしばり、全身全霊で耐えている。

だが、触手の力はあまりにも強大で、彼女の防御も長くは持たないだろう。

俺も魔法を発動出来ず、援護すらままならない。

公爵の狂的な高笑いが響き渡る。完全に動きを封じられた。

ここまでか……！

万策尽きたかと思われた、そのときだった。

ドガアアアン。

広間の天井の一部が、凄まじい轟音と共に崩れ落ちた。

「よお、二人とも！ 派手にやってるじゃねえか！ 俺様抜きで楽しむなよ！」

土煙の中から、聞き慣れた、しかし今は何よりも頼もしく聞こえる声が響く。見上げると、そこには不敵な笑みを浮かべたエニシユが立っていた。

「エニシユ！」

「兄貴！」

「おう！ 遅くなって悪かったな！」

エニシユは瓦礫の上からひらりと飛び降りると、俺たちを見てニヤリと笑う。

「いやー、辺境砦に戻ったら、ダルウィー師匠が急に『トーアとリファだけでは心配やな。おいエニシユ、お前ちよつと様子見てこい』とか言い出してよ。で、『ちようどいい、この転移魔法の試作品を試してみろ！ 安全性は保証せんけどな！』って、無理やりこれで送り出されたってわけだ！ まだ調整中だから着地点がだいぶズレちまったが……どうやら本当にヤバい状況だったみてえだな！ 間に合ってよかったぜ！」

エニシユはそう言って不敵な笑みを深めた。

「な、何奴だ貴様は！ また邪魔者が！」

予期せぬ闖入者に、バフェル公爵が激しく動揺する。

「さて、まずは鬱陶しいその黒いウネウネから掃除しますか！ 魔王様もびつくりの火力を見せてやるぜ！ くらえや！ 獄炎魔法！」

エニシユの手から放たれた、部屋全体を灼熱地獄に変えるかのような極大の火球が、黒い触手を焼き尽くしながらバフェル公爵と宝珠を真正面から呑み込んだ。

「ぐわああああああつ！ 馬鹿な、この宝珠の力が……！ なぜだ、なぜ効かぬ！」

公爵の絶叫が上がる。

『魂喰らいの宝珠』の力は強大だが、エニシユの規格外の魔力によって放たれた獄炎魔法の前には、その防御力も焼き尽くされたようだ。

黒い魔力が大きく揺らぎ霧散し、俺とリファを縛っていた重圧が一気に消え去る。

「今だ、トーア、リファ！」

「おう！」

「心得た！」

エニシユ、俺、リファ。

辺境砦で数々の死線を共に越えてきたトリオが、今、王都で、数年の時を経て再び結成されたのだ。

「リファ、前を頼む！ 宝珠ごと叩き斬れ！」

「任せろ！」

魔力の枷から解放されたリファアが、息を吹き返したように雄叫びを上げ、大剣を構えて突進する。獄炎の余波など意にも介さず、宝珠がかかるうじて保っていた防御結界を叩きつけようと、大剣が唸り上げる。

「エニシュ、援護！ 公爵を足止めしろ！」

「言われなくとも！ 風よ、奴を縛れ！ 暴風拘束魔法！」

エニシュが詠唱を開始。暴風が渦を巻き、炎から逃れようとする公爵の動きを完全に封じ込める。

「俺も援護する！ 幻惑！ それに弱体化も食らえ！」

俺は公爵の精神を揺さぶる幻惑魔法と、防御力を低下させる弱体化魔法を同時に放つ。

「小癩な真似を！ この程度で、この宝珠の力が！ まだだ、まだ終わらんぞ！」

公爵は宝珠の残された力で必死に抵抗するが、三方向からの怒濤の連係攻撃に翻弄され、防御は完全に崩壊寸前だ。

そうだ、思い出した！ あのとときもこうやって、三人で無茶な作戦を成功させたんだ……！ 俺たちの連係攻撃が、負けるはずがない！

辺境砦での訓練の日々、絶望的な戦況を覆した数々の戦いが、走馬灯のように脳裏をよぎる。

互いの背中を預け、言葉などなくとも完璧に通じ合う。あの頃、俺たちが最強だと信じて疑わな

かった、絶対的な信頼と連係の感覚が、今、この場で鮮やかに蘇る。

「とどめだ！ リファア！」

「おおおおおっ！」

リファアの渾身の一撃が、ついに『魂喰らいの宝珠』の表面に深々と突き刺さり、粉碎する。

黒い光が断末魔の叫びのように明滅し、消えていく。

「終わりだ、公爵！ これが俺たちの全力だ！ 食らいやがれ！ 超爆裂魔法！」

エニシュが練りに練った魔力を使った最大火力の魔法が、防御を失い、がら空きになったバフェル公爵の胸元で炸裂した。

「ぐ……ふ……馬鹿な……この私が……こ、こんな……小童どもに……」

黒い魔力は霧散し、バフェル公爵はその場に崩れ落ち、完全に気を失った。

邪悪な光を放っていた『魂喰らいの宝珠』も、砕け散り、ただの黒い石くれとなって床に転がった。

「ふう……終わった、か」

俺は荒い息を吐きながら、その場に座り込む。全身の力が抜けそうさ。

「つたく、相変わらず無茶しやがって。この前の戦いじゃ、見ない間に少しマシになったかと思っただが……全然変わってねえな、お前」

エニシュがやれやれといった様子で俺の隣に腰を下ろす。

「お前たちこそ、私がいなければどうなっていたことか。少しは感謝しろ」

リファも大剣を鞘さやに収めながら、呆あきれたように、しかしどこか満足げな表情で言った。そこへ、衛兵たちを率いてグラースが駆け込んできた。

「トーア！ リファ殿！ エニシュ殿も！ 無事か！」

「ああ、何とかな……なあ、いきなり転移で飛ばされてきたんだが、ここはどこなんだ？」

「バフェル公爵が所持する、王都外れの倉庫の地下だ。我々が目を付けていた土地の一つで、近隣住民から騒さわぎがあつたと通報を受けたんだ」

なるほど、エニシュの登場もだったが、かなり派手な戦いだったからな。

「しかし、まさかと思つて来てみれば……これは……」

グラースは氣を失っているバフェル公爵と、砕けた宝珠の残骸を見て息を呑む。

そして、俺、リファ、エニシュの三人が揃そろっている姿に、何かを確信したような、そして僅かに安堵あんどしたような複雑な表情を浮かべた。

「見事だ。その宝珠は違法な魔道具。これで公爵は完全に失脚し、野望を止められる。約束通り、王国からの支援は確約しよう。あとは我々に任せろ」

グラーズはそう言うと、衛兵たちに公爵の捕縛と現場の確保を迅速に指示し始めた。

その横顔には、カシート家当主としての、そして兄としての確かな決意が見て取れた。

王都の闇に潜む最大の陰謀は、こうして思いがけず再結成されたトリオの手によって打ち破られた。

だが、本当の戦いはこれから始まる。

俺は、頼もしい仲間たちの顔を見ながら、次なる目的地——辺境砦へと思いを馳はせるのだった。

## ◆第二章◆

バフェル公爵を捕縛し、王都の当面の危機を取り除いた俺たち三人は、グラスに後処理を託し、早々に王都を後にした。

目指すは俺たちの第二の故郷とも言える場所、辺境砦ウオイラスだ。

「しかし、転移魔法が大活躍だったな。これがあれば色々楽なんじゃ？」

「師匠は試作品だって言ったろ。まだ安定しねえし、着地点もズレる。お前たちも俺も、今回は運が良かっただけだ」

確かに、そもそもエニシュが辺境砦からこんな遠くまで、目的地近くに転移出来たのは幸運だったのだろう。でも……

「運も実力の内、だろ？ まあ、助かったのは事実だ。礼を言う、エニシュ」

「へっ、礼なんていいから、今度美味い酒でも奢れよ」

「兄貴はまた酔って面倒なことになるんじゃないか？」

リファが呆れたように横槍を入れる。

「うるせえ！ リファこそ、あの公爵相手にもう少し粘れなかったのかよ」

「貴様が来るのが遅すぎただけだ！」

道中、こんな調子で言い合うのも久しぶりだった。

辺境砦にいた頃は、常に死と隣り合わせの緊張感の中、こうやってくだらない言い合いをすることで、互いの無事を確かめ合っていたような気がする。

数日後、見慣れた荒涼とした大地と、その先に聳える巨大な壁が見えてきた。辺境砦ウオイラスだ。

「見えたな」

「ああ。……なんだかんだ言っても、やっぱり落ち着く」

リファが小さく息を吐く。

俺も同感だった。王都の華やかさも、マーシマの海の匂いも悪くはない。だが、この厳しく、しかしどこか懐かしい砦の威容を見ると、心が安らぐのを感じる。

ここで俺は十年を過ごし、生きる術を叩き込まれたのだ。

砦の門が近づくにつれ、警備の兵士たちの姿が増えてくる。

俺たちの姿を認めた衛兵の一人が、驚いたように駆け寄ってきた。

「トリア殿！ それにリファ様とエニシユ様も！ ご無事でしたか！」

「ああ、何とかな。留守中の砦の様子はどうだ？ 俺の連れ……ニツカたちは無事か？」

俺が尋ねると、衛兵は安堵の表情を浮かべた。

「はっ！ 皆様ご壮健です。皆さんの帰りを首を長くしてお待ちでした。ささ、こちらへ」

衛兵に促され、俺たちは砦の中へと足を踏み入れる。

内部は以前と変わらず活気に満ちていた。

行き交う兵士や傭兵、商人たち。訓練場から聞こえてくる剣戟の音。

俺たちが王都で戦っている間も、この砦は機能し続けていたのだ。

すれ違う顔見知りの兵士や傭兵たちが、俺たちの姿を見て驚き、そして笑顔で声をかけてくる。

やがて俺たちが案内されたのは、砦の中でも比較的安全な居住区画にある部屋の一つだった。

扉の前には、見慣れた二人の少女と、松葉杖をついた大男、そしてその傍らに立つ少年が、心配

そうな面持ちで待っていた。

ニツカとグラッサ、そして港町マーシマで出会った漁師ファザロと、彼の息子で海の中を見通す

ユニークスキルを持つロッソだ。

ファザロが失った右足を、ニツカの再生魔法で癒すため、そしてユニークスキルを持つロッソを

守るため、二人には辺境砦まで来てもらっていた。

「トリアさん！」

「トリア！ 遅いよ！」

ニツカとグラッサが駆け寄ってくる。その目には安堵の色が浮かんでいた。

少しの間離れていただけのはずなのに、二人とも以前より少し雰囲気が変わったように見える。

ニツカからは、以前よりも安定した、それでいて深い魔力が感じられ、グラッサの立ち姿や視線の動きにも、戦いを経験した者特有の鋭さが加わっている気がした。

「二人とも、元氣そうだな。心配かけた」

俺は二人の頭を軽く撫でる。王都での激戦を思い返すと、彼女たちをここに残してきて正解だったと改めて思う。

「トリアさんこそ、ご無事で何よりです！ でも、私たちもただ待っていたわけじゃないんですよ！」

ニツカが力強く言う。

「そうそう！ トリアたちがいない間、師匠たちにビシバシ鍛えられてたんだから！ 少しは強くなったはずよ！」

グラッサも胸を張る。

聞けば、ダルモア師匠やルトニー師匠たちが、彼女たちのユニークスキルをより実戦で活かすた



めに、訓練をつけてくれていたらしい。

ニツカは回復魔法だけでなく補助魔法の精度を上げ、同時に種類を増やし、グラッサは複製能力の応用範囲を広げつつ、短剣術も磨いていたようだ。

元々素質は持っている二人だ。

師匠たちの猛特訓を受ければ、その能力は飛躍的に上がっていてもおかしくない。

彼女たちの成長は、これからの戦いの大きな力になるだろう。

「トリア、怪我はないの？」

グラッサが俺の体をペタペタと触って確認する。

「ああ、大丈夫だ。見ての通りピンピンしてる」

「リファも、お疲れ様」

「グラッサたちこそ、留守番ご苦労だったな」

リファも普段のぶつきらばうな態度は鳴りを潜め、穏やかな表情でグラッサに答える。

「二人とも、思ったより早かったな」

彼女たちの後ろからやってきたファザロが、松葉杖に体を預けながら、ホッとしたような表情で言った。

その顔色はマーシマで会ったときよりもずっと良く、力強さが戻ってきている。

「父ちゃんの足、ニツカ姉ちゃんが毎日再生魔法をかけてくれてるんだ！ 見て、少しだけ生えてきたんだよ！」

傍らのロツソが、興奮気味にファザロの膝下を指差す。

そこには、僅かだが確かに新しい皮膚と肉が再生され始めていた。ニツカの力は着実に効果を発揮しているようだ。

「すごいな、ニツカ。ありがとう」

「いえ、ファザロさんが頑張ってくれているからです」

俺は、はにかむニツカに礼を口にする。

「さて、無事の再会を喜んでるところすみませんが、話があります。トーアくんたち、付いてきてください」

師匠の一人であるクライヌが、いつの間にか部屋の入口に立っていて、そんなことを言った。

彼の背後には、ダルモアやルトニーたちの姿も見える。

「師匠」

「王都での活躍、聞きました。見事ですな、トーアくん。そしてリファさん、エニシュくんも」

クライヌは珍しく穏やかな表情で俺たちを労う。

「ですが、休んでいる暇はありません。魔の森攻略に向けた本格的な準備を、これから始めます」

その言葉に、俺たちに緊張が走る。

王都での戦いは終わったが、本当の戦いはこれからなのだ。

俺たちはファザロとロツソに「後でまた来る」と告げ、先を歩く師匠たちに付いていった。

岩の上層階、師匠たちしか入れない特別な区画に向かった俺たちは、特別会議室に入り、円卓に座る。

こちら側には俺、リファ、エニシュ、ニツカ、グラッサが座り、クライヌを筆頭とした七人の師匠たちも座っていた。

部屋には、戦いを前にした独特の緊張感が漂っていた。

「さて、全員揃いましたね」

クライヌが静かに口火を切った。眼鏡の奥の冷静な瞳が、俺以外の仲間たち——ニツカ、グラッサ、リファ、エニシュを順番に見据える。

「まずはトーアくん、リファさん、エニシュさん。王都での任務、ご苦労様でした。バフェル公爵が排除され、王国は政治的に安定するはず。こちらへの援助も確実に行われるでしょう」

労いの言葉に、俺たちは軽く頷く。王都での戦いは終わったが、それはこれから始まる本当の戦いの序章に過ぎない。

立ち読みサンプル  
はここまで

「今日は皆さんに、我々がこれから挑む戦いの真の意味、そしてこの世界の成り立ちについて、真実をお話ししなければなりません」

クライヌの言葉に、俺以外の四人の顔に緊張が走る。

俺は黙って彼らの反応を見守る。

クライヌはおそらく、俺に話して聞かせたのと同じ内容を彼らに伝えるのだろう。

きつと四人は、今まで信じてきた世界を根底から覆されるだろう。俺も最初に聞かされたときは、言葉を失ったしな。

「皆さんは、この世界の創世神話をご存知ですね？ 女神セレーネがこの星に降り立ち、十神と共に生命を育んだ、という……」

クライヌは静かに語り始めた。

「うん、ニツカが前に教えてくれたやつだよね」

グラッサが頷く。

「はい、女神様と十人の神様のお話……」

ニツカも小さく呟く。

「その神話は、一部を除いて真実なのです。ただし……」

クライヌは一呼吸置いた。

「決定的な違いがあります。女神も十神も、我々が想像するような『神』ではありません。彼らは……はるか昔、かつて『地球』という別の星から、この惑星にやってきた『人間』なのです」

クライヌの口から出た未知の言葉と衝撃的な内容に、俺以外の四人は息を呑んだ。

「地球？ 女神様が別の星の人間？ では、私たちが捧げてきた祈りは？」

ニツカが顔面蒼白で、自身の信仰の根幹が揺らぐのを感じながら呟いた。

「人間って……じゃあ魔法とかスキルとか、そういうのも全部作り物ってこと？ あたしのこの力も？」

グラッサは信じられない、という表情で自分の手のひらを見つめる。

「地球。聞いたこともない名前だ。十神も人間だと？ にわかには信じ難い情報だな」

リファは冷静さを装いつつも眉間に僅かな皺を寄せ、情報の真偽を探るようにクライヌを見据える。

「おいおい、マジかよ……神様が宇宙人？ そんな御伽噺みたいな話、誰が信じるかよ！」

エニシュは腕を組み、明らかに信じられないといった顔でクライヌを睨む。

俺は苦笑しながら口を開く。

「いや、作り話じゃない。この星とは全く違う理で動いている、遠い遠い場所だよ」

「トーアくんの言う通りです」